

高山寺経蔵に伝存する鎌倉時代書写の表白文の訓点の性格について

著者	山本 真吾
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	3
ページ	1-14
発行年	1992-05-31
URL	http://hdl.handle.net/10076/6452

高山寺経蔵に伝存する鎌倉時代書写

の表白文の訓点の性格について

山本真五

○キーワード：高山寺・鎌倉時代・表白文・訓点・完全附訓

漢字・部分附訓漢字・対句の訓法

一、はじめに

表白は、諸法会・修法・灌頂などに当たつて、勸請の本尊聖衆の宝前において導師又は表白師が通例開白の座でその法事の趣旨を表啓告白する行為であり、その際に宣読される文章が表白文である。

表白文は、『本朝文粹』などを始め、古来漢詩文集に漢文学の一体としてその位置を与えられているが、その仏教儀式の場に於いて用いられるという性格から、それまで儒者が専ら製作に当たつていたものが、院政期ころより僧侶達も作成するようになる(注1)。この僧侶達の作成した表白文については、旧稿に於いて論じたことがあり(注2)、ここでは、主として、対句表現や助字の用いられ方などの観点からその文体について考察した。

鎌倉時代以降の表白文には、訓点を有するものが多数伝存している。近時、漢籍や佛書のそれに比して著しく遅れていた日

本漢文の訓法の研究が、ようやく本格化しようとしている(注3)。

表白文は、対句表現を基調とする駢麗文でありながら、仏教的色彩を帯び、かかる性格を有する文献の訓法には興味深いものがある。この訓点の性格の全体像を解明するには、文献資料の発掘自体立ち遅れていることから、現時点では困難なところが多いけれども、幸い、京都・高山寺の経蔵に伝存する鎌倉時代の表白文を調査する機を得たので、これを基に訓点についていささかの考察を加え、その特徴に迫つてみたいと思う。

二、高山寺経蔵の鎌倉時代書写表白文の加点点資料

高山寺経蔵に伝存する表白文の中で、加点了された文献は、主として鎌倉時代以降のものによる。

峰岸明博士の調査に拠れば、これらは、

- 一、句読点
- 二、返点
- 三、連続符
- 四、附属語の加点点
- 五、漢字に対する部分附訓・完全附訓

に類別される(注4)。その他、声点や節博士を附したものが

存し、又、四・五は、いずれも仮名による加點のようであり、
ヲコト点の使用は認めがたい(注5)。

但し、右のことは、「一表白」の題を有する、表白文単独で
収められたものについてのことであり、漢詩文集や作法・次第
書の中に収録された表白文については尚調査して確認する必要
がある。例えば、久遠寺蔵の『本朝文粹』卷第十三所収の表白
文「村上天皇御筆法華經供養講説日問者表白文」は、清原教隆
による第五群点・経伝のヲコト点を用いて加點してあり、又、
時代は下るが、随心院蔵『覚禪抄』の「仁王經十九」(第十函
23号)に収められる表白文は、室町時代延徳頃と見られる第三
群点・東大寺点の加點がある。

このように、漢詩文集・作法次第に収められる表白文には、
ヲコト点の用いられた事実がまま存するけれども、法会の場合に
所持して宣読された文献の場合には、専ら仮名によつていたも
のよう判ぜられる。

高山寺に収蔵せられた鎌倉時代書写の表白文の中で、訓点の
存する文献は、次のようである。

※Sは、『高山寺古典籍集』に収録のもの

1、護摩表白初行 S△四一七二一4「6」V 一通

○鎌倉初期写、折紙、墨点(仮名・合符・返点、鎌倉初期)

2、始佛表白 △四一五三一⁴³²V 一通

○鎌倉初期写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名・返点、
鎌倉初期)、紙背消息アリ

3、鎮壇表白 S△四一八七一73V 一通

○鎌倉初期写、綴葉装、墨点(仮名、鎌倉初期)

4、(小嶋流阿弥陀秘口伝等) (「表白」裏書) △四一〇〇

13V 一通

○鎌倉初期写、卷子本、片仮名交り文ヲ含ム、墨点(仮名、
鎌倉初期)、紙継目紙背二花押アリ

5、北斗供表白 S△四一〇五一7V 一通

○鎌倉初期写、切紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名・声点
・合符・返点、鎌倉初期)

6、不動略鎮表白 S△四一二四一9「9」 一通

○鎌倉初期写、折紙、「方便智院」朱印、朱点(合符・返点
句切、鎌倉初期)

7、始佛表白 △四一二四一11「7」V 一通

○鎌倉中期写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名・返点
、鎌倉中期)

8、護摩表白 S△四一五四一51V 一卷

○鎌倉中期写、卷子本、尾欠、「高山寺」朱印、墨点(仮名
、鎌倉中期)

9、十八道表白 S△四一五七二9「1」V 一通

○鎌倉中期写、折紙、墨点(仮名、鎌倉中期)

10、鎮壇表白 △四一一三一44「1」V 一通

○鎌倉中期写、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉中期)

11、鎮壇表白 △四一一三一44「2」V 一通

- 鎌倉中期写、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉中期)
- 12、初夜表白 S△四一七三一4「10」V 一通
- 鎌倉中期写、折紙、「高山寺」朱印、朱点(仮名・句切、鎌倉中期)
- 13、建長元年五月十二日於善妙寺松原殿御房行略鎮法之時表白 S△四一九七一82V 一通
- 鎌倉中期写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉中期)
- 14、表白 S△四一五六一10「29」V 一通
- 鎌倉中期写、断簡、墨点(仮名・返点、鎌倉中期)
- 15、星供表白(端裏外題) S△二一332V 一卷
- 鎌倉時代元応二年写、仁弁筆、卷子本(小本)、墨点(仮名・声点・返点、元応二年)、表紙新補 一通
- 16、北斗供表白 △四一九七一33V 一通
- 鎌倉後期写、切紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉後期) 断簡一葉
- 17、表白 S△四一五六一6「70」V 断簡一葉
- 鎌倉後期写、折本装柀型、首尾欠、墨節博士(鎌倉後期)
- 18、略鎮法表白 △四一五七一29「29」V 一通
- 鎌倉後期写、仁助筆、折紙、墨点(仮名、鎌倉後期)
- 19、北斗供表白 △四一七二一7「14」V 一通
- 鎌倉後期写、続紙、天地墨界、墨点(仮名・声点、鎌倉後期)

20、表白 △四一八〇一108V 一通

○鎌倉末期写、折紙、墨点(仮名、鎌倉末期)

21、表白 △四一三九一34V 一冊

A「両界供養表白」、B「御影供養表白」

○鎌倉末期写、袋綴装横長本、「方便智院」朱印、墨点(仮名・返点、鎌倉末期)

右の他に、鎌倉時代以前の表白文である、

(護摩表白) S △四一八二一2V 一帖

○平安時代天喜六年写、綴葉装柀型、「高山寺」朱印、押界

、墨点(仮名、平安後期)

の一点が存するが、墨点仮名は、次の一箇所にしか確認されな

い。

○脈^{サイキ}脇肉(3ウ6)

三、訓点の性格

この項では、前掲二十一篇の表白文の加點資料を対象としてその訓点の性格を明らかにすべく考察を加えることとする。高山寺経蔵の、この二十一篇の訓点について見渡した場合、あらかじめ重要と思しき問題点を掲げれば次のようである。

(1) 表白文における訓点の伝承

(2) 漢字に対する附訓の状況

— 完全附訓漢字と部分附訓漢字の意味するところ —

(3) 対句の訓法

(4) 漢籍・仏書・和化漢文といった表現内容・文体の相違

に基づく訓法の差異と表白文の訓法との関係

以下、主として右の四点について、順次検討をすすめる。

(1) 表白文における訓点の伝承

峰岸明博士・金水敏氏の指摘になつたように(注6)、鎌倉時代になると、既存の文例の改作・襲用ということが盛んに行なわれるようになる。その場合、そこに加えられた訓点はそのように継承されるのかという問題が浮上する。

ここで問題としている二十一篇について見た場合、

5、北斗供表白八四一〇五七V 鎌倉初期写

16、北斗供表白八四一九七三V 鎌倉後期写

19、北斗供表白八四一七二一七「14」V 鎌倉後期写、尾欠の三篇と、

6、不動略鎮表白八四一二四一9「9」V 鎌倉初期写

13、建長元年五月十二日於善妙寺松原殿御房行略鎮法之時表

白八四一九七一82V 鎌倉中期写

18、略鎮法表白八四一五七一29「29」V 鎌倉後期写

の三篇が、鎌倉時代の初期・中期・後期と時期を異にして書写されている。

まず、「北斗供表白」の三篇について、冒頭部を抄出してみ

ると次のようであり、返点の有無に小異の存するものの附屬語の加點、漢字に対する施訓が悉く一致しているのである。

5 「夫以受生於人倫招形於二儀・者誰不信北極之威」「力不仰星

宿之擁護

16 「夫以受生於人倫招形於二儀・者誰不信北極之威」「力不仰星

宿之擁護

19 「夫以受生於人倫招形於二儀・者誰不信北極之威」「力不仰星

宿之擁護

字音注・声点についても同様で、「仰宗人」、「雲(平)霧(平)」など三篇共通しており、さらに、誤読と考えられる「万邦」までも一致しているのである。これら三篇の施訓の中で一致しないのは、「遐齡」についての声点のみであつて、16・19に付してある「遐」字一上声、「齡」字一平声の点が5には認められない。

「略鎮法表白」の三篇については、13・18は全文同文であるが、6は冒頭・末尾は一致するものの本文そのものに若干の異同があり、恐らく13・18は、この6を改作したものであらうとされる（注7）。

本文の一致する箇所について見てみると、その加点点箇所はすべて一致しており、「世漸及澆季 國更恐過惡」を始め、附屬語の加点点は本自、完全附訓・部分附訓の状況まで一致しているのである。但し、「自東自西招万一年之福祐 云南云北却无量之災變」（6）について、13では、「自東自西招万一年之福祐 云南云北却无量之災變」となっており、テニヲハの加点点等に小異が存するほか、鎌倉初期（6）・中期（13）では、この「却」字に「シリソケム」とあるのに対して、時代の状況を反映して、鎌倉後期（18）では「シリソケン」とある。同じく、6・13では、「飽」字に「ユタカナラム」とあるのに対して、18では「ユタカナラン」とある。

このように、前代の表白文を改作・襲用するに際して、基本的には、その訓点までも継承しているふしが看取されるのである。

右の他、20表白八四一八〇一108V 鎌倉末期写は、「佛（入

濁）眼（平濁）」「所（平）照（去）」「性（平）徳（入濁）」等、多くの字音読み語に声点を付す態度が認められ、二十一篇中異彩を放っている。この表白文は、末尾に「此表白者北院御室御製作云々」とあつて、第六代仁和寺御室・守覚法親王

の作と伝えられるものであり、文章中にも「傳十八道之印明」とあるように十八道法に関する表白文であることが判る。この表白文の、恐らく原本と考えられる文献が、現在仁和寺に蔵されており（靈五七函）、伝守覚筆とする鎌倉時代初期の書写と見做されるものである（注8）。仁和寺蔵の「十八道初行表白」と外題されるこの文献の本文は、高山寺蔵のそれと概ね一致し、声点までも悉く共通しているのである。このように、他の経蔵に伝存する文献との関係をも追求することで、御室の宣説が伝承されてゆく過程を垣間見ることができるのである。

それでは、かように伝承されるに至る加点点の原理とは、一体どのようなものであるのか、次には、漢字に対する完全附訓・部分附訓の様相を観察することで、見通しを立ててみたい。

（2）漢字に対する附訓の状況

1 完全附訓漢字と部分附訓漢字の意味するところ

峰岸明博士は、本経蔵の表白文の一を取上げ、漢文本文の漢字について、その訓の全音節が示されている場合（完全附訓）と、捨て仮名や送り仮名等の一部分のみが示されている場合（

部分附訓)とがあつて、部分附訓の漢字は、日常常用の漢字群であつて、完全附訓漢字は、その枠外にある漢字群であることを報告された(注9)。

本稿では、これを承けて二十一篇のすべてについて、漢字と訓との関係を調査してみようと思う。

まず、完全附訓漢字は、次の通りであつて、品詞ごとに類別して示す。附訓は、代表例一例のみを掲げ、各用例の下に所在として前掲の表白文の番号を示す。()の数字は、三巻本色葉字類抄において、同一の訓の下に配列されている漢字の数、その上の「」の数字は、右の漢字配列における当該漢字の掲出順位、*のあるものは合点の付されていることを示し、又、Kは、それが黒川本に拠ることを示す。

(名詞の類)

脚「アシ」21B―「2」(4)、今「イマ」8―「1」(4)、影「カケ」14―「1」(1)、鎖「クサリ」21A―「5」(5) K、口學「クチマネ」8、國「クニ」6・13・18―「1」(4) K、明「ミアカシ」14―「オホミアカシ」テ掲出)、者「モノ」5・13・16・19・21B―「2」(4)、世「ヨ」6・13・18―「1」(3)、據「ヨトコロ」5・16・19、斧「ヲノ」7―「1」(2) K、
(動詞の類)
値「アヒ」21A―「5*」(46)、仰「アフカ」5・9・16・19―「1*」(10)、射「イ」21B―「1*」(3)、折「イ

ノル」5・16・19―「1*」(10)、入「イラ」6・13・18―「1*」(21)、敬「ウヤマテ」17―「1」(3) K、得「エ」8・21B・21B―「1」(4) K、獲「エ」20―「2」(4) K、飾「カサル」1―「1*」(14)、狩「カ(テ)」21B―「1*」(14)、粉「クタキ」21B―「25」K、消「ケシ」18―「1」(5) K、刊「ケツリ」6・13・18―「2」(20) K、却「シリソケ(ム)」6・13・18―「2」(17)、為「ス」21B・21B・21B・21B―「4*」(5)、捨「ステ」21B―「1」(44)、添「ソヘ」21B―「1」(15) K、垂「ソムキテ」20―「1」(2) K、垂「タレ(タマヘ)」10―「1」(16) K、付「ツク」5・16・19―「1」(54) K、盡「ツキ」1―「1」(61) K、衝「ツク」21B―「6」(31) K、慎「ツ、シム」13・18―「5」(56) K、癖「テラシテ」21B―「12」(10) K、成「ナリ」21A・B―「1」(27) K、臨「ソマハ」6・13・18―「2」(15) K、始「ハシメ」2・4―「1」(45)、引「ヒイテ」21A―「1*」(42)、増「マス」14―「1」(29) K、招「マネキ」6・13・18―「3」(5) K、焼「ヤキ」6・13・18―「1」(18) K、育「ヤシナフ」21B―「3」(30) K、忘「ワスル」21B―「1」(17)、了「オハリキ」21A―「1*」(20)、折「ヨリ」21B―「1」(5) K
(形容動詞の類)

皇哉「オホイナルカナ」20―「18」(77)K、峻「スルトニシテ」21B―X(7)、飽「ユタカナラム」6・13・18―X(22「ユタカニ」)、

(副詞・接続詞の類)

強「アナカチニ」8―「1」(3)、剩「アマサヘ」1、預「アラカシメ」20―「1*」(6)、是以「コ、ヨモテ」4、殊「コトム(右シ)ハ」17―「2*」(「コトニ」11)、既而「ステニシテ」8―「1*」(「ステニ」4)、當初「ソノカミニ」21A―「1」(1)K、夫惟「ソレヲモヒミレハ」4、夫以「ソレオモンミレハ」8・10・11、唯「タ、」9・10―「5」(15)K、猶「ナラシ」2―「1」(「ナホ」11)K、并「ナラヒニ」17・20―「11」(「ナラフ」27)K、遙「ハルカニ」13・18―「1*」(39)、潛「ヒソカニ」20―「4*」(16)、

(助辭の類)

哉「カナ」21B―「1」(2)、令「シム」2―「1*」(8)、不「ス」―「2*」(3)、為「タル」10・11―「1」(3)K、也「ナリ」13・13・13―「1」(4)K、可「ヘキ」6・6・8・13・13・18・18―「1*」(11)、哉「ヤ」5―「3」(5)K、

次に、同様の調査をして、部分附訓漢字を掲げる。
(名詞の類)

間「(アヒ)タ」21A―「1」(9)、頂「(イタ、)キ」21―「1」(3)、疑「(ウタカ)ヒ」5・16―「1」(14)K、形「(カタ)チ」21A―「1*」(33)、情「(コ、)口」21B―「3」(3)、之「(コ)レ」13―「8」(20)、是「(コ)レ」13・21B―「1*」(20)、為「(タ)メニ」21A―「1」(2)K、力「(チカ)ラ」13・18―「1」(8)、罪「(ツ)ミ」21A―「1」(19)K、所「(トコ)ロ」4―「2」(3)、者「(モ)ノ」5―「2」(4)、

(動詞の類)

与「(アタ)ヘ」21B・21B―「2*」(26)、當「(アタ)ル」15―「1*」(40)、値「(ア)ヒ」21A―「5*」(46)、仰「(アフ)ク」5・16・19・21A―「1*」(10)、争「(アラソ)ハム」16―「1*」(10)、非「(アラ)ス」8・18―「1*」(4)、表「(アラハ)シ」13・18―「8*」(45)、現「(アラハ)ス」6―「5」(45)、改「(アラタ)メテ」5・16・19―「1*」(12)、有「(ア)リ」2・5・5・5・16・16・19・21A・21B―「1*」(8)、忽「(イソ)ク」21A―「1*」(5)、致「(イタ)ス」6・10―「3*」(「イタル」ノ項、「致」字ニ「又イタス」トアリ、85)、懷「(イタ)ケリ」21B―「1*」(6)、出「(イタ)シテ」3―「1*」(2)、至「(イタ)ル」21B―「1*」(85)、祈「(イノ)ル」6・15・18・18―「1*」(10)、云「(イ)ヒ」6・13・13―「6*」(7)、受「(ウ)ケ」

5・8・15・16・19・21A―「1」(30)、疑「(ウタカ)ハ
 ム」2―「1」(14)K、生「(ウマ)レ」21A―「1」(3)
 K、揮「(エラ)ムテ」4・20―「3」(27)、發「(オコ)
 シ」2―「1」(17)K、恐「(オソ)ル」6・9・13・18―
 「2」(51)K、訪「(オトナ)ヘハ」13×(1)、蒙「
 カウフ)リ」6・15―「1」(16)、曜「(カ、ヤ)キ」21
 B―「3」(13)、隠「(カク)シ」6―「1」(61)、
 顧「(カヘリ)ミル」13・18―「1」(15)、極「(キハ)
 ム」21B―「1」(33)、摧「(クタ)キ」21A―「1」(25)
)K、企「(クハ)タテ、」20―「1」(4)K、加「(ク
 ハ)ヘテ」21A・B―「1」(12)K、汲「(ク)ム」21B―
 「1」(8)K、捧「(サ、)ク」5・15・16―「1」(5)
 、授「(サツ)ク」21A―「1」(2)、定「(サタ)メテ」
 20―「1」(20)、隨「(シタカ)フ」21A―「1」(52)
 、示「(シメ)ス」13・18・21A・21A―「1」(10)、退
 「(シリ)ツケ」1・13―「1」(17)、知「(シ)ル」21
 A―「1」(15)、備「(ソナ)ヘ」15―「1」(24)K、
 資「(タス)ク」21B―「5」(42)K、奉「(タテマツ)ラ」
 2・4・4・14・14・21A―「1」(13)K、湛「(タ、)ヘ
 テ」21B―「1」(9)K、立「(タ)ツ」3―「1」(32)
 K、貴「(タフ)トフ」21B―「2」(14)K、給「(タマ)
 フ」2・2・4・13・18―「1」(19)K、垂「(タ)レテ」
 4―「1」(16)K、盡「(ツ)ク」6―「1」(61)K、盡

「(ツク)シ」6・13・18・21A―「1」(61)K、傳「(ツ
 タ)フ」1・8・20・21B―「1」(10)K、慎「(ツ、)シ
 ム」6―「5」(56)K、勤「(ツト)ム」21A―「1」(45)
 K、積「(ツ)ム」20―「1」(16)K、照「(テラ)ス」21
 B―「1」(12)、曜「(テラ)サム」21B―「5」(12)、
 説「(ト)キ」21B―「1」(13)、遂「(ト)ケム」21B
 「1」(7)、唱「(トナ)ヘ」13・18―「1」(18)、
 投「(ナ)ク」21B―「1」(10)K、成「(ナ)シテ」1・
 2・2・5・16・16・19・21B×(2)K、拔「(又)キ」
 21B―「1」(21)、抽「(又)キ」21B―「5」(21)、
 除「(ノソ)キ」2・20―「1」(19)K、始「(ハシ)メ」
 8―「1」(45)、離「(ハナ)シ」18―「1」(13)、放
 「(ハナ)ツ」5・16・19・21A―「1」(11)、拂「(ハ
 ラ)フ」5・15・16・19―「1」(34)、開「(ヒラ)ク」
 5・16・19・21A―「1」(38)、披「(ヒラ)キ」10・11
 「2」(38)、誇「(ホコ)ラム」15―「1」(21)、
 施「(ホトコ)シ」5・16―「1」(26)、滅「(ホロホ)
 ス」2―「3」(3)、儲「(マウ)ケ」6・13・18―「1」
 (15)K、白「(マウ)シテ」8・20―「2」(32)K、言「
 (マウ)サク」20―「4」(「マウス」32)K、任「(マカ)
 セ」4・10・11―「1」(9)、學「(マナ)ヒ」1・21B―
 「1」(20)K、招「(マネ)ク」5―「3」(5)K、滿「
 (ミタ)シ」5・15・19―「1」(「ミツ」41)K、滿「(ミ)

ツ」14―「1」(41) K、求「(モト)メン」21 B―「1*」
(26)、焼「(ヤ)ク」21 A―「1」(18) K、依「(ヨ)ル」
2・10・11―「1」(71)、喜「(ヨロコ)フ」21 A―「4*」
(45)、渡「(ワタ)ル」21 B―「2*」(33)、煩「(ワツ
ラ)ヒ」2―「1*」(18)、趣「(ヲモフ)キ」2―「1」
(16) K、

(形容詞の類)

卑「(イヤ)シ」10―「6*」(47)、多「(オホ)シ」13・
18・21 A―「1」(20) K、難「(カタ)キ」4・21 A・21 A
・21 A・21 A・21 A―「1*」(41)、高「(タカ)クシテ」
21 B―「1」(3) K、无「(ナ)シ」13・18・21 B・21 B・
21 B―「4」(16) K、廣「(ヒロ)クシテ」21 B―「1*」
(22)、空「(ムナシ)カラシヤ」1―「1」(24) K、易「
(ヤス)シ」2―「1」(62) K、

(形容動詞の類)

大「(オホキ)ナル」21 A―「1」(77) K、閉「(シツカ)
ナラ」6・13―「2*」(「シツカニ」52)、

(副詞・接続詞の類)

豈「(ア)ニ」5―「1*」(4)、敢「(アヘ)テ」20―「
1*」(15)、聊「(イサ、カ)ニ」21 A―「1*」(3)、
況「(イハム)ヤ」21 B―「1*」(3)、同「(オナシ)ク」
21 B・21 B―「1」(7) K、自「(オノツカ)ラ」14・21 B
―「1*」(8)、凡「(オホヨ)ソ」13・18・21 B―「1」

(1) K、忝「(カタシケナ)ク」9―「1*」(9)、爰「
(コ、)ニ」1・6・13・18―「1*」(28)、悉「(コトコ
ト)ク」1―「1*」(24)、殊「(コト)ニ」8・21 A・21
A・21 B・21 B―「2*」(11)、是以「(コ、)ヲモ(テ)」
5、依之「(コレ)ニ(ヨテ)」6・8、更「(サラ)ニ」6
・13・18―「1*」(3)、頻「(シキリ)ニ」6・13・18―
「1*」(8)、然「(シカ)ルニ」4―「3*」(「シカリ」
6)、而「(シカル)ニ」8―「1*」(6)、然則「(シカ)
レハ(スナハ)チ」20、既「(ステ)ニ」2・4・20・21 A―
「1*」(4)、已「(ステ)ニ」1・13・18―「2*」(4)
、速「(スミヤカ)ニ」1・2・5・9・15・16・16・19・20
―「1*」(47)、夫「(ソ)レ」6・13・18―「1*」(8)
K、夫以「(ソレオモヒミ)レハ」5・16・19・20、忽「(タ
チマチ)ニ」2・5・16・19―「1」(21) K、常「(ツネ)
ニ」21 A―「1」(12) K、具「(ツフサ)ニ」21 A―「1」
(5) K、鎮「(トコシナ)ヘニ」21 A―「1」(7)、就中
「(ナカンツク)ニ」6―「1」(1) K、永「(ナカク)13
―「1」(18) K、并「(ナラ)ヒニ」9―「11」(「ナラフ」
27) K、尚「(ナ)ヲ」21 A・21 B・21 B―「1」(11) K、
願「(ネカハク)ハ」9―「1」(「ネカフ」38) K、早「(
ハヤ)ク」9―「1*」(9)、遙「(ハルカ)ニ」6―「1
」(39)、久「(ヒサシ)ク」13・18―「1」(23)、偏
「(ヒトヘ)ニ」6―「1」(1)、誠「(マコト)ニ」5・

16・18―「2」(54) K、方「(マサ)ニ」13
 ・18―「1」(16) K、将「(マサ)ニ」20―「2」(16) K、
 皆「(ミ)ナ」13―「1」(13) K、若「(モ)シ」6・13・
 18―「1*」(5)、漸「(ヤウヤ)ク」6・13・18―「1」
 (9) K、故「(ユエ)ニ」14―「1」(4)、所以「(ユ)
 へ」5・16・19・21 A―「1」(1) K、能「(ヨ)ク」21
 B―「1」(2)

(助辞の類)

如「(コト)ク」3―「1*」(11)、令「(シ)メ」4・21
 A―「1*」(8)、不「(サ)ラム」5・16・19―「2*」
 (3)、可「(ハ)キ」21 A・21 A・21 A―「1*」()
 11)、自「(ヨ)リ」―「46」(71)、

以上の調査を踏まえて、同一語でも異漢字表記はそれぞれを
 一として数え、三巻本色葉字類抄の掲出順位に注目して、集計
 すると左の如くなる。

〔完全附訓漢字〕

○第一・二位―四九例(六八・一%)、第三位以下で合点付―
 三例(四・二%)、その他―二〇例(二七・八%)

〔部分附訓漢字〕

○第一・二位―一三三例(八三・六%)、第三位以下で合点付―
 一八例(五・〇%)、その他―一八例(一一・三%)

このように、部分附訓漢字の方では、一・二位又合点の付せ

られているものが大部分を占め、完全附訓漢字は、比較的その
 割合の低いことが窺われるのである。

しかしながら、完全附訓漢字の中にも、一・二位に掲出され
 る、所謂日常常用漢字と思われるものも相当数含まれている事
 実も見逃せない。これらは、別の附訓理由を求めなければなら
 ないが、書写上の問題を絡めても(注10)、その一々について
 すべて説明付けが可能ではないし、とかく恣意的な解釈に陥る
 危険性を孕んでいる。ただ、今回の表本文の加點資料を通覧し
 て、対句の読始めと読終わりに全訓ルビの多いことに気付いた
 ことは記し留めておきたい。

○^ヲ莊^ヲ奠^ヲ於^ヲ北^ヲ辰^ヲ囉^ヲ宿^ヲ之^ヲ蜜^ヲ「密」壇^ニ、

^ヲ祈^ヲ福^ヲ壽^ヲ於^ヲ西^ヲ母^ヲ長^ヲ生^ヲ之^ヲ遐^ヲ齡^ニ(5)

○^ヨ世^ヲ漸^ヲ及^ヲ澆^ヲ季^ニ、

^ク國^ニ更^ニ恐^ル禍^ニ惡^ヲ(6)

○^ニ光^ツ滿^ツ堂^中、^ニ自^ラ消^シ無^明業^障、

^カ影^ヲ照^ス佛^前、^ニ忽^ズ增^ス有^為榮^福(14)

○自東自西（西キ）招（招キ）万年之福祐、

云南（云）云北（北）却（却）无量之災變（18）

完全附訓漢字の「世（ヨ）」・「國（クニ）」・「祈（イノル）」・「消（ケシ）」・「影（カケ）」・「増（マス）」・「招（マネキ）」・「却（シリソカン）」等は、いずれも色葉字類抄の掲出順位第一・二位のものであつて、最も定訓的であると判ぜられる。しかるに、かように完全附訓を施しているのであつて、それは、句の読始め・読終わりの箇所である。

峰岸明博士は、鎌倉時代以降の表白文には、段落ごとの改行や字下げなどの工夫をして「朗唱の容易化」を意図する傾向を指摘されるが（注11）、かような完全附訓例もその線上で解釈できるように思われる。

(3) 対句の訓法

小林芳規博士は、対句の訓法にも変遷が認められ、又、対句の構造によつても、訓法に異なりの生ずることを明らかにされた（注12）。

本経蔵の表白文も平安時代以来の伝統に則つて対句表現を駆使しての駢儷文で記されており、作文の核となる対句表現の訓法は考察の重要な視点となる。

ここでは、訓点によつて上句の訓法の判るものを対象として

整理してみることとする。尚、次のような中止形式か終止形式か判然としないものは除外してある。

○薄命（ハス）不聞名（ハス）、重垢（ハス）不能入（コト）（8）

本経蔵の表白文の対句の訓法は、大部分、当代一般の訓法を反映して上句を中止形式で訓む。

○宿（ユク）一因内薰（ユク）、良（ニ）一縁外熱（ユク）（1・緊句）

○大法師某、初受（ハ）十八契印（ハ）、次傳（ニ）兩部行法（ハ）（8・長句）

○怨念（ウレ）若臨（ウレ）、砌（ウレ）威怒（ウレ）之火光（ウレ）、燒盡（ウレ）、鬼神（ウレ）謬入（ウレ）境者（ウレ）、智恵（ウレ）之刀劍（ウレ）

降伏（ウレ）（6・密隔句）

○現（ウレ）十九慕惡相貌（ウレ）、降伏（ウレ）四魔惡群（ウレ）、

蒙（ウレ）三世如来（ウレ）、教勅（ウレ）、利益（ウレ）五濁衆生（ウレ）、給（ウレ）（13・密隔句）

右のように、単句対（緊句・長句）も、隔句対も、ともに上句を中止形式で訓じている（鎌倉初期写―10箇所、中期写―11箇所、後期写―26箇所、を確認）。

この他、上句に接続助詞「テ」を添えるものも認められる（

鎌倉初期写―2箇所、中期写―0箇所、後期写―4箇所、を確認）。

○世漸及澆季、

國更恐禍惡（6・長句）

○荘礼奠於北辰曜宿之蜜「密」壇、

祈福壽於西母長生之遐齡（5・長句）

但し、隔句対については、まま終止形式にするものが認められる（鎌倉初期写―2例、中期写―0例、後期写―6例、を確認）。

○礼供有憑 改死籍付生籍

婦仰有據 轉厄怪成慶福（5・軽隔句）

○大日如来大衆 化妙覺以上為伴侶

金剛サタ大欲 狩等覺以下為眷屬（21B・密隔句）

これらの終止形式の残存する理由は、現段階では未詳とせざるを得ないが注目に値すると思われるのである。

（4）表現内容・文体の相違に基づく訓法の差異と表白文の

訓法との関係

本邦における漢文訓読において、平安時代中期から鎌倉時代に、儒者による漢籍の訓読と、僧侶による仏書の訓読との間、更には和化漢文の訓読との間に、助字の訓法を中心として、訓法に種々の対立点のあることが明らかにされている（注13）。

鎌倉時代の表白文は、対句表現を基調とする漢文学としての要素と、法会において宣読されるという仏教的色彩とを兼ね備え、更に和化漢文的要素をも含むものであつて（注14）、かかる文章ジャンルの訓法と先の訓法の対立との関係は如何であるかという問題は、極めて興味深いと言わなければならない。

残念ながら、この稿で対象とした表白文には、従来、訓法の対立があるとされた指標となる助字に対する加點例が寡少であつて、明確なことが言い得ない。従つて、更なる調査を俟つて今後に期するところが多いけれども、以下に、わずかに調べ得た点について記すこととする。

①「悉」・「盡」

○惑一塵悉盡（1）、八部无量天龍盡致奉事（6）

漢籍では「コトゴトクニ」と読まれ、仏書・和化漢文では、「コトゴトク」と読むとされるものである。

②「不能」（読み添え）

○重垢不能入 (8)

漢籍では「コト」を読み添えて「コトアタハズ」と読まれ、和化漢文では「ニ」を読み添えて「ニアタハズ」と読まれるとされる。

③「也」

○可折者 佛界也 (13)、皆是大悲利生懷轍也 (13)

漢籍では不読にされ、和化漢文では「ナリ」と読まれるとされる。なお仏書は多く漢籍と同様不読であるが、教行信証古点では「ナリ」と読むとのことである。

④「況」(呼応)

○況人倫有情哉 況僧徒有慈哉 (21)

漢籍では「ヲヤ」で呼応するか「ムヤ」で呼応するのに對して、和化漢文では呼応語がないとされる。なお仏書は原則として漢籍と同様であるが、稀に呼応語の無い場合がある。

⑤「而」(文頭)

○而今大法師某、初受十八契印、次傳兩部行法 (8)

漢籍では「シカウシテ」と順接に読まれることが多いのに對して、和化漢文では「シカルニ」「シカルヲ」などと逆接に読まれるとされる。なお、これらに對して仏書では「シカモ」と

読まれることが多いとされる。

四、むすび

以上、聊か疎略な叙述に走った嫌いはあるが、高山寺経蔵に伝存する鎌倉時代書写の表白文の加點資料に基づいて、訓点の性格について考察をすすめてきた。かかる研究は、まだ緒にいたばかりであつて、今後、他の文庫・寺院より発掘した表白文の加點資料をも含めて、又、更に別の有効な視点をも盛り込みながら、総合的に考えてゆかねばならないと思われる。

注

- (1) 築島裕「高山寺本表白集の研究」(高山寺資料叢書第二冊『高山寺古往来 表白集』所収、昭52・東京大学出版会)
 - (2) 山本真吾「『高山寺本表白集』所収の表白の文体」(『鎌倉時代語研究』九、昭61・5)
 - (3) 同「高山寺経蔵に伝存する鎌倉時代書写の表白文の文体について」(『国文学攷』一二三、平成元・9)
 - (4) 山本秀人「久遠寺蔵本朝文粹清原教隆点の訓法について―助字の訓法を中心に―」(『鎌倉時代語研究』一四、平成3・10)
- (4) 峰岸明「表白の文章様式について」(高山寺資料叢書

別巻『高山寺典籍文書の研究』所収、昭55・東京大学出版会)

(5) 金水敏『高山寺古典籍纂集』第四部祭文・表白・願文

三解題(高山寺資料叢書第一七冊所収、平成元・東京大学出版会)

(6) 注(4)・(5)文献

(7) 注(5)文献

(8) 仁和寺調査、平成元年八月三十日原本実見。

(9) 注(4)文献

(10) 山口佳紀「片仮名交り文振り仮名小見―仁真筆本『真聞集』の場合―」(昭和六十三年度高山寺典籍文書綜合調査団「研究報告論集」平成元・3)

(11) 注(4)文献

(12) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(昭42・東京大学出版会)

(13) 注(12)文献

(14) 山本真吾「平安時代に於ける表白文の文体的性格―和化漢文的要素に注目して―」(『国文学攷』一一五

昭62・9)

〔附記〕

御尊蔵の文献の閲覧調査をお許し頂き、貴重な御教示を賜った高山寺御当局並びに高山寺典籍文書綜合調査団の諸先生に厚く御礼申し上げます。〔本学教員〕